

---

# 聖夜の贈り物

汐路 凜

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖夜の贈り物

### 【Nコード】

N6207F

### 【作者名】

汐路 凜

### 【あらすじ】

サンタクロースはクリスマス・イヴの夜にやってくる。ほら、耳を澄ませば聴こえてくるはず。冬空に響く鈴の音が。そしてここにも、サンタクロースを待ち侘びている男の子がひとり。昨年書き上げた作品です。クリスマス気分に浸って頂ければ幸いです。

## （前書き）

童話は初の試みなので、手探り状態で書き上げました。子供の視点になっていたので当初すべて平仮名で書いたのですが、他サイトで読みにくいというご意見も頂いたので、改訂しました。

サンタクロースはクリスマス・イヴの夜にやってくる。毎年クリスマス朝には、枕のそばにプレゼントがおいてあるんだ。

今日はクリスマス・イヴ。

ぼくは朝からサンタさんが来るのが待ち遠しくて、たっくんが遊びに来たときも、サンタさんにお手紙を書いていたんだ。

「れんくん、なにしてるの？」

テレビにあきたたっくんが、ぼくのお手紙をのぞきこんで言った。

「サンタさんにおてがみかいてるの。きょうはクリスマス・イヴだから」

「サンタさんはパパなんだよ」

ぼくがサンタさんのお話をする、たっくんはいつもそう言う。でもね、ほんとうはたっくんも、サンタさんを信じたいんじゃないかって思うんだ。

だってぼく、ようちえんでたっくんがサンタさんにお手紙を書いているのを見たことがあるもん。たっくんははずかしがりやさんだから、ぼくは見ていないふりをしたんだけど。

十

夜になって、おじいちゃんとおばあちゃんがたくさんプレゼントをもってやってきた。

ママの作ったごちそうを食べて、大人はお酒を飲んで、みんな

クリスマス・パーティー。

みんなが幸せそうな顔をしている。だからぼく、クリスマスって大好きなんだ。

「早く寝ないと、サンタさんが来てくれないわよ」

ぼくに絵本を読んでくれながらママがいった。

でもぼくは今年こそ、サンタさんが来るまでぜったいに起きてるんだ。

だって聞きたいことがいっぱいあるんだもん。

たとえば、

『うちにはえんとつがないのに、いつもどこからはいつてくるの?』

とか、

『トナカイはどうやってそらをとぶの?』

とか、ほかにたくさんあるんだけど、まだ一度もサンタさんに会えたことがないんだ。サンタさんが来るまで起きておこうって思うのに、いつも眠ってしまう。

でも今日はがんばって起きてるぞ。

シャン シャンシャン……。

ほら、鈴の音が聴こえてきた。

きつともう、すぐそこまで来てるんだ。

どうしよう。

なんだか急にドキドキしてきた。最初に会ったときはなんて言おう?

まずは、やっぱり

『メリー・クリスマス』

ってあいさつして、それから

「じこしょうかい」もしなきゃ。いつもプレゼントありがとうって  
お礼をして、それからいつしよにいろんなお話をするんだ。

げんかんのほうで音がする。

きつとサンタさんだ！

ぼくはいそいでベッドからはねおきて、ドアのほうへはしった。

ドスン。

いったあゝい。いきおいあまってドアにぶつかった……と、思っ  
たらだれかが立っている。

「なんだ、まだ起きてたのか？」

なあゝんだ、パパか。サンタさんかと思ったのに……ちょっとガ  
ツカリ。

「早く寝なさい」

「はあゝい」

あれ？ パパがうしろにまわした手に、なにをもっている。

「パパ、それなに？」

「え？ えゝと……ああ、これは今日パパが会社の人にもらったん  
だよ」

パパはなんだかママにしかられたときの

「いいわけ」みたいに、ぼそぼそと言った。

「ふうん。ぼくにプレゼントかとおもった」

たつくんが、

『サンタクロースはパパなんだよ』  
って言っていたのを思いだした。

「プレゼントはサンタさんが持ってきて来るんだろ？　ほら、早く寝ないとサンタさん来てくれないぞ」

パパってば、ママとおなじこと言ってる。

「はあい。でもぼく、きょうはサンタさんがくるまで、ぜったいおきてるよ。もしサンタさんがきたとき、ぼくがねてたらパパおこしてね」

「わかったよ。寒いから早くベッドに入りなさい」

「はあゝい。おやすみなさい」

「おやすみ」

ぼくがベッドに入ったのをたしかめると、パパは電気をけしてお部屋を出ていった。

十

カーテンのすきまからお月さまが見える。  
よかった。少しでも明るいほうが、サンタさんのトナカイも走り

やすいよね、きつと。

いま何時だろう。

時計の読み方はパパに教えてもらっただけど……え〜と、短い針が「9」よりちよつと上にきてて、長い針が

「5」のところにきてるから……9じ25ふん！

いつもならもう眠ってる時間だ。サンタさんて、何時に来るんだろう。

ちよつと眠くなってきちゃった。

カチ カチ カチ……。

時計の音を聞いてるとよけい眠くなるなあ。でもがんばっておきてなきゃ……。

カチ カチ カチ……。

……。

「もう寝たかな？」

「いくらなんでも寝てるわよ、もう12時だもの」

パパとママの声が聞こえる。やっぱりサンタさんはパパなのかな？  
うつん、ちがう、きつとふたりともぼくの  
「ようす」を見に來ただけだ。

キーンッ。



ドアが開いた。  
起きてるってばれたら、怒られちゃうかな？

「メリークリスマス。蓮くん」

あれ？ パパの声じゃない。てゆうことは。

バサッ。お布団をはねのけて振り向くと、真っ赤なお洋服を着たおじいさんが立っていた。

「サンタさん！？ほんとにほんとにサンタさんなの！？」

ぼくはベッドからジャンプしてサンタさんに抱きついた。

「ホーホーホー！今年もいい子だった蓮くんにプレゼントを持ってきたんじゃないよ」

ぼくは最高にうれしかった。だって、やっとサンタさんに会えたんだもん！明日、ぜったいたっくんと言わなきゃ。

そういえば、サンタさんはたっくんのおうちに行ったのかな。

「はい、これが今年のプレゼントじゃ」

サンタさんはぼくをベッドに座らせると、プレゼントをくれた。

「ありがとう！」

「ねえ、サンタさん、たっくんのおうちにはもういったの？」

ぼくはさつきから気なっていたことを聞いてみた。

『サンタさんは信じてる子のところに来るのよ』

いつかママがそう言っていたのを思い出したからだ。

「たつくん？ ああ、拓人<sup>たくと</sup>くんのことかね？」

「うん。たつくんはいつも、サンタさんなんていないっていうんだけど、ほんととはたつくんも、サンタさんを信じたいんだとおもうんだ。もしあしたのあさ、めがさめてサンタさんからのプレゼントがなかったら、ガッカリするとおもって……」

サンタさんはぼくにウインクしてこう言った。

「それなら一緒に拓人くんの家にプレゼントを届けに行こう」

「いつしよに？」

「そうじゃよ。おっと、いかん。外は寒いからな」

そう言ってサンタさんがまたウインクすると、ぼくのパジャマは、ふわふわの白いボタンがついた赤いお洋服に変わっていた。

「うわあ！ まほうもつかえるの？」

「ま、少しの間だけ、わしの助手というところじゃな」

サンタさんはそう言って窓の方へ指を向けて、パチン、と鳴らし

た。窓の向こうには、トナカイの引くそりが待っている。

「さて、行こうか」

「うん！」

ぼくがサンタさんの

「じよしゅ」だって。今日は最高のクリスマスだ！

シャン シャンシャン……。

冬の空に鈴の音を響かせて、そりが走りだした。

「うわあゝ。ほんとにとんでるよ！！」

トナカイの引くそりはぐんぐん高くのぼって、ぼくのおうちも、おとなりのれなちゃんのおうちも、いつも遊んでる公園も、みぐんなどんどんちっちゃくなっていた。

さっきまでベッドで見ていたお月さまも、もうちょっとでさわれそうなくらい近くに見える。

「寒くないかね？」

「うん。だいじょうぶ！」

冬のつめたい空気がほつぺたを刺していたけど、寒くはなかった。それよりぼくはわくわくしてたんだ。

「ねえ、サンタさん、ぼくのおてがみよんでくれた？」

「おお。ほれ、ここに。ココアもおいしかったのう」

ぼくがサンタさんに書いたお手紙を、ママはポットに入れたあつたかいココアといっしょに、テーブルの上に置いてくれてた。

『だってお客様なものね』

そう言っていたずらっこみたいに笑ってたぼくのママって、最高だと思う。

「ほれ、拓人くんの家が見えて来たぞ」

サンタさんが指さした先に、たっくんのおうちが見えた。

「ほんとだ！ でもどこからはいるの？ たっくんのおうちはマンションだから、えんとつもないよ」

「どこからでも入れるさ。わしを待ってる子がいる家ならな」

そう言ってサンタさんがまたウィンクする。体がふわっと浮いたと思ったら、ぼくらもうはたっくんのお部屋の中にいた。

たっくんはベッドの中ですやすやと寝息をたてている。起こしてあげようかな。きっとサンタさんを見たら喜ぶと思うんだけど。

「メリー・クリスマス拓人くん」

「メリー・クリスマスたっくん」

ぼくはサンタさんのまねをして言った。

まぐらのそばには、たっくんがようちえんで書いていたサンタさ

んへのお手紙が置いてあった。サンタさんはプレゼントを置くと、お手紙をそつとじぶんのポケットに入れた。

「よまないの？」

「だいたいの内容はわかっておるからな。後でまたゆっくり読むよ」

「サンタさんて、あいてのかんがえてることも、わかるの？」

「誰かに何かを伝えたい時、それが真摯な想いであれば、ちゃんと伝わるんじゃない」

「しんしつて？」

「真剣に……そうじゃな、純粹に心から想うことじゃな」

「じゃあ、たつくんはなにをおねがいたの？」

「そうじゃな……これを見てごらん」

サンタさんはそう言うと、ベッドの反対側の壁を指さした。

壁にはジョンが映っていた。まるで映画を見ているみたいだ。

ジョンで言うのは、たつくんのおうちで飼っている犬なんだけど、いまは動物病院に

「にゅういん」している。

郵便屋さんが来たときに、たつくんママがドアを開けた瞬間、お外に飛び出して行ったんだって。

そのあとみんなで探したんだけど、たつくんパパが見つけたときには、ジョンは自分りもずっと大きな野良犬に、噛まれてしまっ

ていた。

ぼくはパパたちが、首を噛まれているから、もう助からないだろうって言っていたのを聞いてしまったんだ。

たっくんには言えなかった。

だってたっくんは、ジョンが帰って来るって信じているから。

でもジョンはがんばっている。ほんとうなら助からないって言われていたのに、すこしずつ元気になってきてる。お医者さんもびっくりしていたってたっくんのママが言ってた。

きつとたっくんの

「おいのり」が通じたんだ。

「そうじゃよ」

ぼくが考えていると、サンタさんが言った。

「お祈りというのは、ただお願いするだけじゃない。心から信じることじゃ」

「しんじる？」

「そうじゃ。拓人くんはジョンが元気になって帰ってくると信じておる。ただジョンを助けて下さいとお願いしてるだけじゃない。たとえばサンタクロースは信じていなくてもな」

サンタさんはそう言って、にっこり笑った。

「れんくん？」

たっくんが目を覚ました。サンタさんの姿を見ると、口を開けて

びっくりしている。

「おお、こりゃいかん。起こしてしまったたようじゃな。少し喋り過ぎたかの」

「たつくん、ジョンはきつともうすぐかえってくるよ」

ぼくはサンタさんのまねをして、たつくにウィンクした。

「さて、そろそろ次の家に行かなければ。夜はあつというまに明けてしまうからのう」

「おやすみ、たつくん。またあしたあそぼうね」

「ホーホーホー！ メリー・クリスマス！」

口を開けたままのたつくにそう言って、ぼくらはたつくんのおうちをあとにした。

+

「……れん、蓮くん」

ママの声で目が覚めた。

「起きて、ごはん食べなさい。もう10時よ」

もう朝なんだ。

せっかくサンタさんにあえたのに……え？ 朝！？

「サンタさんは！？ ママ、サンタさんみた！？」

「今年もプレゼント、もらえてよかったわね。蓮、いい子だったもんね」

ママはそう言って、ぼくのおでこにキスをした。

枕のそばには、プレゼントが置いてある。

昨日の夜のサンタさんは、ぼくの夢だったのかな。でもサンタさんにもらったプレゼントは確かにあるし……やっぱりサンタさんは来てくれたんだ。

きつとそうだ。

ううん、ぜったいにそうだ。

『サンタさんは信じてる子のところに来るのよ』

ママもパパも、ようちえんの先生だって言ってたし。

ぼくは信じてる。

だからきつと、サンタさんは来てくれたんだ。

あれ？ プレゼントの下に、なにかはさまってる。なんだろう？

……お手紙だ。

「ねえママ、これなんてかいてあるの？」

「え？」

ママはふしぎそうな顔をして、そのお手紙を読んてくれた。

『蓮くんへ。』

わしが信じる子のところへ行くというのはほんとつじやよ。



信じる気持ちがあれば、なんでもできるからじゃ。

自分を信じること、大切な誰かを信じること、そして、見えない何かを信じること。

来年も、その気持ちをわすれずに、いい子で      メリー・クリスマス。

サンタクロース』

「ぼく、昨日の夜サンタさんに会ったんだよ！      やっぱり、夢じゃなかったんだね！！」

ぼくはうれしくてママに抱きついた。

「そうね。蓮が信じていたからサンタさんは来てくれたのね」

ママはにっこりわらうと、ぼくをぎゅう、ってしてくれた。  
やっぱりぼくのママは最高だ。

「れんくん！      あそぼー！」

「あ！      たつくんだ！」

ぼくが急いで走っていくと、たつくんはジョンをだっこしてげんかに立っていた。

「ジョン、げんきになったんだね！」

ぼくが言つと、たつくんはうれしそうに笑った。

「あのねれんくん、ぼく、きのうのよること、おぼえてるよ。サ

ンタさんで、やっぱりほんとにいたんだね」

たっくんが、ぼくのお耳にお口を寄せて言った。

「うん！ でもきのうのよるのことは、おとなにはないしょだよ」

ぼくはたっくんにウィンクした。

サンタさん、今年もプレゼントありがとう。

ぼくはずっと信じてるから、来年もまた来てね。

メリー・クリスマス。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6207f/>

---

聖夜の贈り物

2010年12月11日14時51分発行